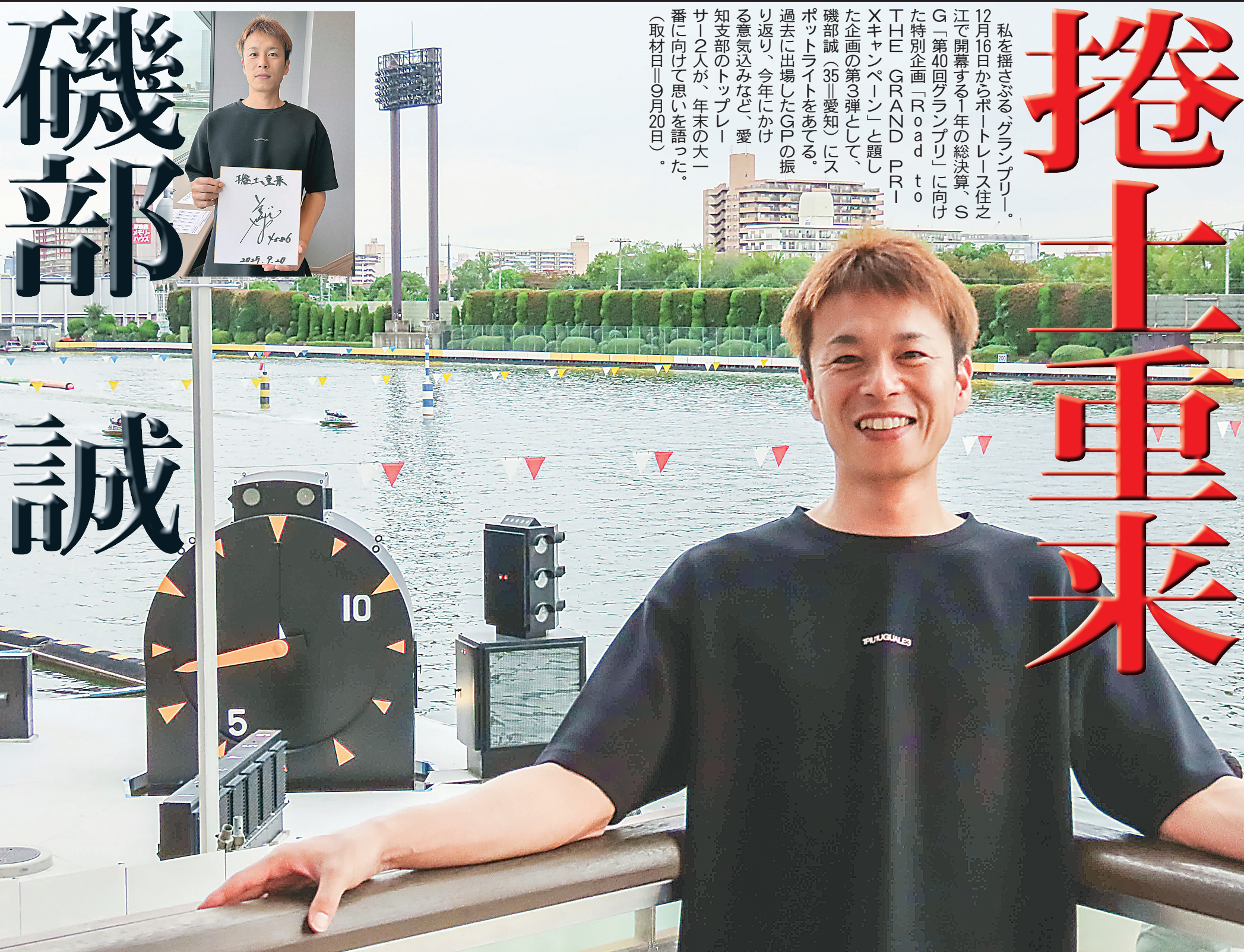


捲土重来

私を揺さぶる、グランプリ。12月16日からボートレース住之江で開幕する1年の総決算、SG「第40回グランプリ」に向けた特別企画「Road to THE GRAND PRIXキャンペーン」と題した企画の第3弾として、磯部誠（35歳愛知）にスポットライトをあてる。過去に出場したGPの振り返り、今年にかけの意気込みなど、愛知支部のトッププレーヤー2人が、年末の一番に向けて思いを語った。（取材日＝9月20日）。

磯部 誠



6	5	4	3	2	1	枠番
北野 輝季	平本 真之	杉山 正樹	池田 浩二	磯部 誠	西山 貴浩	選手名

磯部誠 私のグランプリ
「1回目は大村だった。僕は住之江のGPで22年大会、賞金ランク14位で初出場。TR1stは4、1着。2回戦では4コースから見事なまくり差してTR初勝利。勢いのまま2ndを2、2、5着で突破。GPでSG初優出を果たし、ファイナルは3着。「上出来でした」と振り返った。23年はランキング5位で2nd発進。4、1、4着で突破した。優勝戦はまたも3着。「1回目は大村だった。僕は住之江のGPで22年大会、賞金ランク14位で初出場。TR1stは4、1着。2回戦では4コースから見事なまくり差してTR初勝利。勢いのまま2ndを2、2、5着で突破。GPでSG初優出を果たし、ファイナルは3着。「上出来でした」と振り返った。23年はランキング5位で2nd発進。4、1、4着で突破した。優勝戦はまたも3着。」

05年の6月某日、中学3年の磯部誠は、自転車に懸命にこいでいた。1時間かけて常滑に到着。植木通彦が優勝した笹川賞オースター（の直後、一般戦が開催されていた。友人と一緒にレースを初観戦。ボートレースの迫力に圧倒された。「びびった。舟の上に人が立っていた。エンジン音に水しぶき。その時、選手になるうと思った」。中3の誓いから20年、磯部は3度目のグランプリ出場を射撃圏にとらえる。ハレーボールに打ち込む少年だった。石川祐希（29歳、パールジャ）は5学年下。一緒に練習した記憶もある。「僕が高校生で、彼は中学生。この子はうまいな、センスあるなって思ってた。ああなっちゃった（笑い）。ハレー部の友人の家族がボートレース好きで、影響されて魅力を知ることになる。ハレーボール選手が夢だった少年が、20年の時を経て、トップレーサーの1人となった。

GPは22年大村大会、賞金ランク14位で初出場。TR1stは4、1着。2回戦では4コースから見事なまくり差してTR初勝利。勢いのまま2ndを2、2、5着で突破。GPでSG初優出を果たし、ファイナルは3着。「上出来でした」と振り返った。23年はランキング5位で2nd発進。4、1、4着で突破した。優勝戦はまたも3着。「1回目は大村だった。僕は住之江のGPで22年大会、賞金ランク14位で初出場。TR1stは4、1着。2回戦では4コースから見事なまくり差してTR初勝利。勢いのまま2ndを2、2、5着で突破。GPでSG初優出を果たし、ファイナルは3着。」

↑磯部選手が考える優勝戦メンバー↑



22年グランプリ1st
「これが俺のグランプリだ。当企画に登場した選手が「理想のグランプリ」出走メンバーを独断で作成。いつか夢の一番が実現する日がやってくる。」

これからが大詰め
リベンジの1年
「来年こそ」
GP出場逃した24年

「燃え尽きたではないけど、気持ちが入ってこなかった。成績も悪くて、なかなか変わらなくて」。伸びを求め、出足型に戻すなど調整面の試行錯誤も続いた。結果が出ないことが、メンタルに影響を及ぼす。負のスパイラルとも言える日々を過ごす中で、ずっとある言葉が、頭の片隅にあった。臥薪嘗胆（がしんしょうたん）。「目的を達成するために、苦難や努力を耐え忍ぶ」。中学時代、国語教諭から贈られた言葉だ。「ボートの選手になりたかった。先生が、この言葉を贈りますと言ってくれた。中3の僕には響きましたね。いつも心のどこかにあって、大事にしています」。苦しい1年を過ごす中、気持ちは25年に向いていたという。「来年こそ、と思っています」。



自己紹介
名前 磯部 誠
生年月日 1990. 9. 8
自分の性格 熱いやつ、冷めやうい
趣味 野球観戦
特技 ポート（使）
得意な決め手 差し
好きな色 赤
好きな食べ物 魚
ひと言 捲土重来

しか見たことがなかったの
で、自分が出場して、テレビで見ていたやつだと。すごく緊張感があった。独特の雰囲気になれそうにならながらも、2年連続のファイナル進出。翌年へ向け、周囲の期待はふくらんだ。
迎えた24年は苦しい。SG優出1回、GI優出も1回、優勝は一般戦の2回。GP出場を逃した。「燃え尽きたではないけど、気持ちが入ってこなかった。成績も悪くて、なかなか変わらなくて」。伸びを求め、出足型に戻すなど調整面の試行錯誤も続いた。結果が出ないことが、メンタルに影響を及ぼす。負のスパイラルとも言える日々を過ごす中で、ずっとある言葉が、頭の片隅にあった。臥薪嘗胆（がしんしょうたん）。「目的を達成するために、苦難や努力を耐え忍ぶ」。中学時代、国語教諭から贈られた言葉だ。「ボートの選手になりたかった。先生が、この言葉を贈りますと言ってくれた。中3の僕には響きましたね。いつも心のどこかにあって、大事にしています」。苦しい1年を過ごす中、気持ちは25年に向いていたという。「来年こそ、と思っています」。

先生から贈られた言葉
今年のは年始の地元戦で優勝、3月には常滑周年を制した。SGはオールスターで優出6着、GIは優出3回、優勝1回（9月24日現在）。順調に賞金を加算している。リベンジの1年は、これから大詰めだ。「ハレー部の友達に感謝ですね。当時は、ボートの話ばかりしないで、ハレーを真剣にやってくれよ。って思っていました（笑い）。」。磯部をボートレースに導いた友人も大切な言葉を授けてくれた先生も、きつと活躍を喜んでいるはず。苦しい1年を乗り越え、努力を重ねて3度目の年末へ。臥薪嘗胆、結実させる。